

越流対策型布製型枠工法による「粘り強い河川堤防」の越水に対する耐侵食性 (1)

旭化成アドバンス(株) 正会員○石井 大悟 鍋嶋 靖浩, 太陽工業(株)川岸 靖 横山 美憲 加藤 雅大
大嘉産業(株) 津川 鉄矢 桃澤 竜生, 岡三リビング(株) 小浪 岳治 関山 徹, 山口大学 森 啓年

1. はじめに

近年の気候変動により洪水被害が頻発化・激甚化しており, それに対し被害を防止・軽減することが求められている。また令和元年台風第19号による洪水では, 全国で142箇所の河川堤防が決壊し, そのうち122箇所は越水が決壊の主要因であるとされている。このような背景から, 越水した場合であっても「粘り強い河川堤防」に求められる性能について技術検討が行われ, 越水に対する性能の評価の目安となる外力は「越流水深30cmに対して, 越流時間3時間」とされた¹⁾。

本研究では, 表面被覆型である越流対策型布製型枠(モルタル被覆タイプ)を模型堤防の法面に被覆し, 越水実験を行った結果による被覆工の変形と堤体の侵食状況(侵食防止効果)を報告する。

2. 実験概要

2. 1 堤体構造

実験は国土技術政策総合研究所の大規模模型実験水路

(中)実験施設にて行った。実験断面を図-1に示す。実験断面は堤防高さ2.5m, 天端幅3.0m, 表・裏法面1:2.0勾配, 基礎地盤高さ1.0m, ドレーン工厚み0.5mの模型堤防を構築した。堤体および基礎地盤の土質は細粒土含有率 $F_c=35\%$ 以下の砂質土とし, 締固め度は90%以上, 越水実験前に用いた土質の粒度試験および築堤堤体の引張破壊応力を確認した。締固めに際しては最適含水比 w_{opt} (若干湿潤側)に調整し, 撒き出し厚10~30cm程度毎に締固めを行い, 締固め度 $D_c \geq 90\%$ 程度で管理した。表法面側の盛土材料は表法面側の堤体内への浸透の影響は考慮しないことよりセメント改良土を利用することとし, 表法面側に遮水シートを敷設した。セメント改良土の配合は, 普通ポルトランドセメントを用い, セメント配合量 150kg/m^3 程度で改良を行った。裏法面の法尻部にドレーン工を設置し, 中詰材として割栗石(粒径150~230mm)を用いた。ドレーン工の外周には吸出し防止材として長繊維不織布($t=3\text{mm}$)を敷設した。天端保護工の仕様は, アスファルト表層5cm厚, 砕石路盤層15cm厚とした。被覆工は越流対策布製型枠(モルタル被覆タイプ, 平均厚み10cm)を敷設し, ポンプ車にてモルタルを布製型枠へ圧入した。なお布製型枠は法面部を版構造, 法尻部をドレーンからの浸透水を排水するためフィルター構造とした。越水実験前の状況を写真-1に示す。

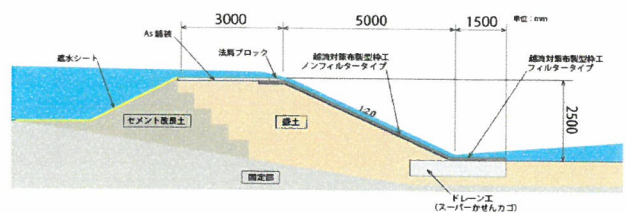


図-1 実験堤体断面

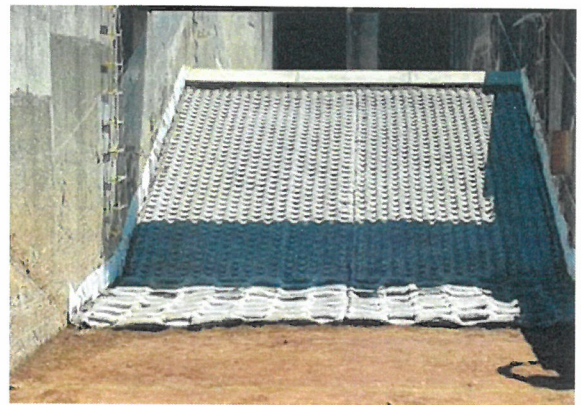


写真-1 越水実験前状況

2. 2 実験手順

堤体模型を構築後, 越流水深30cmまで一定速度で水位を上昇させた後に水深を一定に保ち, 1時間以上経過

キーワード 粘り強い河川堤防, 越水, 越流対策型布製型枠工法, 布製型枠,
連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-21 住友不動産御成門駅前ビル8F
旭化成アドバンス(株) 建材本部 環境資材事業部 TEL03-5404-5612

するまで越流させ、越水実験前後で天端保護工、法肩ブロック、裏法保護工、裏法尻保護工、ドレーン工、基礎地盤の各部位の変位についてレベル測量を行った。

この手順を3回繰り返し、累計3時間以上の越水実験を実施した。越水実験後、被覆工を撤去し背面の侵食状況、および実験前後の被覆工を除く堤体標高を確認した。越流実験の状況を写真-2に示す。

3. 実験結果

越水実験前および1時間毎の各部位における変位計測結果を図-2に示す。図-2は縦軸に標高、横軸に水平距離を示し、実験断面の越流時間毎

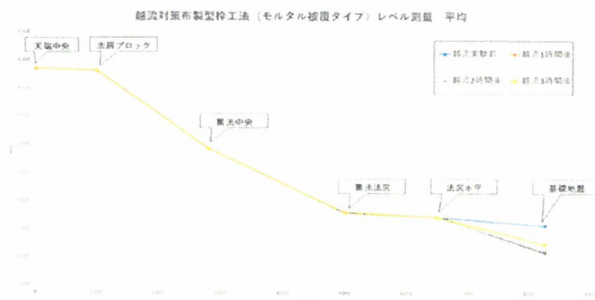


図-2 越水実験前後の各部位変位

に変位が確認できるように整理した。写真-3に越水実験後の状況写真を示す。図-2、写真-3から判るように、天端高さは越流時間3時間経過後も変わらず維持されており、前述の性能の評価の目安となる外力に対して越水に対する性能を維持している状態であったことがいえる。また、法肩ブロックから被覆工を含む法尻水平部まで変位は生じず、越流水深30cmおよび越流時間3時間の外力が作用しても健全な状態であった。一方、被覆工がなく裸地である基礎地盤部においては、越流時間経過に伴い、洗堀が進行する過程が確認出来た。越水実験後の基礎地盤部における最大洗堀深は43.6cmであった。

図-3は被覆工施工前および撤去後のレベル測量結果、写真-4は被覆工撤去後の堤体状況を示しているが、計測や目視においても越流水による侵食痕や洗堀痕は確認出来ず、今回の越水は堤体に影響を与えるものではなかった。また、堤体土の引張破壊応力については、越水実験前は平均 $1.85\text{kN/m}^2 (18.9\text{gf/cm}^2)$ であり、越水実験後は $1.56\text{kN/m}^2 (15.9\text{gf/cm}^2)$ を計測し、越水実験前後において堤体土の引張破壊応力はほとんど変化が見られなかった。

4. まとめ

実験結果より、越流対策型布製型枠（モルタル被覆タイプ）は、越水に対する性能の評価の目安となる外力「越流水深30cm」に対して、越流時間3時間」に対して、越水に対する性能を維持しているとともに、堤体に影響を与えるものではないことを確認した。

参考文献

- 1) 国土交通省国土技術政策総合研究所，国立研究開発法人 土木研究所：粘り強い河川堤防の構造検討に係る技術資料（案）Ver1.1，令和5年3月



写真-2 越水実験状況



写真-3 越水実験後状況



写真-4 被覆工撤去後の堤体状況

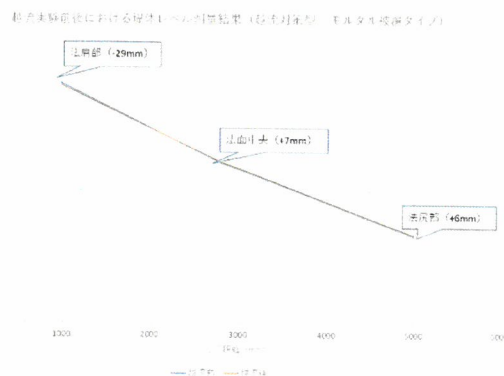


図-3 越水実験前後の堤体変位